

Ralph McInerny: *Being and Predication, Thomistic Interpretations.*

Studies in Philosophy and History of Philosophy, Vol. 16

The Catholic University of America Press, 1986. xii+323 p.

水田英実

本書は、著者のマキナーニ教授がこれまでに公けにしてきた論文の中から20編を選んで、「存在しているものと述語付け」という題をつけてまとめたものである。本書に収録された各論文は、それぞれ独立に様々のかたちで発表されたものであるが、著者自身によれば、全編を通じていわば半分意識的に一つの本の各章として書かれてきたものであるという。じっさい第1章から第20章までを通して読んでみると、同種の発言がかなりの回数で繰り返されていることに気付くから、その点にむしろ、著者が四半世紀に及ぶトマス研究において、ある一貫した主張を持ち続けてきたことの証左を読みとればよいのであろう。

「トマス・アクィナス：概観」と題する第1章は、比較的最近刊行された『中世辞典』(Scribner, 1982)に収録された、「トマス・アクィナス」の項の再録である。トマスは基本的に神学者であるとみる視点から、その生涯と思想を概観したものであるが、最後に没後七百年記念(1974年)に際して、多数の論文等が発表されたことに言及して、「トマスが書いたものをすべて読んだ人はわずかにいても、トマスについて書かれたものをすべて読むことは人間的に不可能になった」と言いながら、暗に著者自身を指して、「それでも四半世紀をトマス研究に費やした者にとっては、それらの著作に一書をつけ加えないことが出来ない」と結んでいる。本書の標題から既にある程度類推出来るように、著者の主たる関心事はトマスの形而上学を、ジルソンらのいわゆる existential interpretation とは違う仕方では解釈することにあり、そのために論者たちが拠り所とするトマスのテキストを著者もまた取り上げ、それをトマスとともに読もうとしているのである(この姿勢は、巻末に詳細な引用箇所索引を付していることにも示されている)。またその意味で、「本書の以下の各章は、過去何十年かの間に行なわれてきたトマス思想に関する諸解釈を扱っている」と言うのである。

じっさい著者は、自由学芸といわゆるスコラ哲学の関係を論じた第2章においてはシュニユを、「第一動者と学の順序」と題する第3章ではオーエンスをといった具合に、各章で近年のトマス学者たちの諸説を次々に紹介して、批判している。(巻末に付された人名・事項索引を使えば、本書はいわば現代トミズム事典として役立つ。)この点は、The New Scholasticism 誌の編集長として、トマス研究者たちの動向を具に見てきた著者の面目躍如たるところであろう。ただしその際注意してよいと思われるのは、著者がしばしばトマスの『ポエティウス三位一体論注解』に言及し、そこに述べられたトマスの学問論を根拠にして、議論を展開させていることである。本書第4章「アリストテレスの形而上学における存在論と神学」において、イエーガーの成立史的研究から言えば、存在一般の学が神的存在に関する学でもあるというアリストテレスの叙述は「矛盾」でしかないけれども、トマスはそういうアリストテレスの形而上学に独自の解釈を与えていると指摘しているのも、特に『形而上学』第6巻1章に関してであり、それこそは『ポエティウス三位一体論注解』の中で学問分類の問題を論じたときに典拠として言及されている箇所にはかならないのである。

トマスの形而上学に関する著者の解釈は、特にこの『注解』(Wyser(1948)版による)のテキストにもとづいている。中でも同注解の第5問第3項の、理論的な学の質料からの分離の度合による自然学・数学・形而上学への分類を論じている箇所は、トマスの“existentialism”の証拠として、論者たちによって最もしばしば引合いに出されるところである。そこで著者は本書第12章に、「トマスの Existentialism に関する覚え書」と題して、同名の(20編の中で最も発表年次の早い、1955年の)論文を収録し、この『注解』の上記の箇所からトマスの“existentialism”を読みとる解釈に反対して、トマス自身のテキストの脈絡の中で読むことを提唱している。著者によれば、同注解における speculabilia を質料からの分離の度合によって分ける議論は、従来からの「学問の順序」を否定する根拠にならないし、存在と本質の實在的な区別をまず認識するところから、形而上学が始まるという最近の「トマス説」を根拠付けられるものでもないのである。分離ないし否定判断にしても、形而上学そのものにしても、自然学における論証の後で成り立つのである。第一哲学ないし形而上学は、われわれが最後に学ぶべき学問であるとするのが、アリストテレス以来の「学問の順序」であり、トマスも『三位一体論注解』やその他のテキストでこの順序を踏襲している。ところがこの順序は実はトマス自身の考えと合わないと言主張する研究者が多数出てきたので

ある。著者が第12章で批判しているのは、特にこの従来の順序を否定する解釈がトマス哲学をアリストテレスのそれから区別するために“existentialism”の提唱を伴う点である。

続く第13章には本書と同じ標題が付けられている。“John is”というときの“is”は、賓辞でも繫辞でもないと主張するジルソン説の批判を通して、いわゆる“existential proposition”をどう扱うかという問題を論じながら、ここでも著者は、トマスの形而上学の中に“existentialism”を見出しうると主張する人たちに対して、「関連のあるいくつかのテキストに関する、有力な existential な解釈について考察するとともにトマスのテキストを考察する」。そうすることによって“Thomistic Existentialism”の史的な不正確さと学説上の不備を明らかにさせうると信じているというのである。存在は概念化されないから述語にならないという立場に立つと、「存在」は判断においてしか捉えられないから、「存在しているもの」は単純把握の働きによって捉えられた本質とそれが存在しているという判断を包含したものであることになると解釈する人たち (e.g. ジルソン) に対して、著者は「存在」は概念化されるし述語にもなるから、「存在しているもの」の概念は判断を含まないと主張する。その根拠は上述の『注解』に求められている (p. 187)。この『注解』におけるトマスの記述は、アリストテレスの論理学以外のものを必要としないし、トマスの論理学は形而上学と同様、アリストテレスを注解する中で語られているともいう。「アリストテレスはトマスがいなければ何も語らない」というピコ・デラ・ミランドラとは反対に、アリストテレス説がトマス説を通して明瞭にされていることは否定しないにしても、著者が *sine Aristotele Thomas mutus esset* という確信の持ち主であることは著者自身が表明していることなのである。

第13章の後半では同じ確信にもとづいてアリストテレスの『形而上学』第5巻を単なる用語辞典ではなく、形而上学の展開の一段階として、「より先・より後」の順序に従って述語付けられる *communia* を考察する箇所と見るのが、トマスの『形而上学注解』の立場であるとし、同巻第7章でも「存在しているもの」についてその立場からアナロジ的な説明がなされていると見る。(ちなみに、本書第5章は、『形而上学』第5巻に関するこのようなトマス説を論じたものである。なお、アナロジアに関する著者の見解は、*The Logic of Analogy* (1961) に詳しい)。

本書第14章において著者は、“*Esse ut Actus Intensivus*”と題して、ファブロの業

績を取り上げ、現代のトマス研究を推進させた原動力としてそれを高く評価しながら、ここでもファプロの *La Noeione Metafisica di Partecipazione* (1938, 1950) がやはり、最初に上記の『注解』(第5問第3項)を論じていることを指摘し、かつ著者自身は、ファプロの解釈に従わないと表明し、ファプロのエッセ理解が形而上学の可能性に限界をもうけることになるのではないかという疑問を提起している。しかしこの点はむしろ、アリストテレス解釈者としてのトマスをどのように評価するかという別の問題に属することであろう。アリストテレス解釈者ならざるトマスを強調する諸説に対して、著者は、あくまでもアリストテレス解釈者としてのトマスを強調している。しかしその論じ方に『アナロジアの論理』と共通する傾き(著者は、アナロジアを論理的な概念であると見て、事物の存在の仕方ではなく認識されている事柄の表現の仕方にかかわると考える。)が見受けられるにしても、『ニコマコス倫理学』(本書第6章、なお著者には *Ethica Thomistica: The moral Philosophy of Thomas Aquinas* (1982) もある。)を取り上げ、ポエティウス(7章)、アルベルトゥス・マグヌス(8, 9章)、ボナヴェントゥーラ(10章)、スコトゥス(11章)らとトマス説の関係を論じ、アナロジアの問題に関してカエタヌス(18章)を取り上げ、また上に名前を挙げたトマス研究者たちのほかにもマリタン(19, 20章)について論じるなど、著者のトマス研究が豊かな内容を持っていることを、本書は如実に物語っている。

Camille Bérubé : *De l'Homme à Dieu selon Duns Scot,
Henri de Gand et Olivi.*

Istituto Storico dei Cappuccini. 1988, xiv+390 p.

八 木 雄 二

全部で十一編の論文を収めた論文集の形を取っているが、最初のものは残りの論文の意図と概略を示している。第二、第三論文はスコトゥス以前、第四から第九論文までがスコトゥスに関するもの、第十論文はスコトゥス以後、第十一論文はこの論文集ではあまり触れられていないスコトゥス神学の性格についての論文という構成である(論文名は文末を参照)。